五感で感じる野遊び体験　結山者の道

指南書

山折り

五感で感じる野遊び体験「結山者への道」
発行元：Goldwin Field Research Lab.
企画・リサーチ：上沢勇人（FRL.）
酒井功雄
川地真史（Deep Care Lab）
宮本萌々子（Deep Care Lab）
井出明日佳（Deep Care Lab）
デザイン制作：中家寿之
イラストレーション：オカモトレイコ

はじめに

ようこそ、金時山へ。
ここは単なる山ではありません。
いにしえより、荒ぶる神「カナヤマノカミ」が宿る聖なる場所です。
かつてこの山で育った金太郎は、山のすべてと結びつき、調和をもたらしました。
しかし、その教えは忘れられ、山は今、悲鳴をあげています。
現在、山の登山道は荒れ、土が流され、植物と動物と人の結びつきが失われています。
山は今、新たな『結山者（ゆざんしゃ）』を求めています。
あなたは今日、ただの登山者ではなく、『結山者見習い』として山に入ります。
四つの試練をすべて乗り越えた者だけが、真の結山者となれるでしょう。
金時山を舞台に、山との新たな関わり方を体験してみましょう。

注意点

◉この物語は、架空の伝承です。実際の金時山の伝承・物語とは関係がありません。
◉参加者は、「登山者」ではなく「結山者」という架空の役割を設定として、山を登ります。
　普段の登山とちがった自然や山の感じ方を得ることが狙いです。結山者としてふるまってみましょう。
◉お山や他の登山客への配慮は大切です。
　登山道を占有する・決められた道を歩く・ゴミを捨てるなどは控えましょう。
　他の登山客には挨拶を欠かさず、何をしているか尋ねられた際には、
「山の問題をあそびながら知るゲームをやっている」などと簡単に伝えてみてください。
◉地図上の道のりは、必要時間の関係で、登頂することなく途中で折り返すように設定されています。
　登頂したい場合は、二時間ほどの追加時間を見込みましょう。
◉ご自身の体調、健康状態、事故等には十分な注意を払って、無理なく安全にあそびましょう

組み立て方

◉結山者の道

短辺を点線に沿って山折り

長辺を点線に沿って山折り
折り畳んだ状態で、左上の印部分に穴あけ

「結山者の道」の間に
「指示書・試練書・結山者の証」をはさみ、
カードリングで綴じる
（紐を通すと持ち歩きやすいです）

◉指示書・試練書・結山者の証（計十枚）

右上の印部分に穴あけ
短辺を点線に沿って山折り

「指示書・試練書・結山者の証（計十枚）」を
同様に加工し、手前から
㊀～㊉の順番になるように重ねる

◉結山者名

カット線で切り分け
上部の印部分に穴あけ

概要

目標◉全ての試練を乗り越え、結山者の証として印を手に入れよう
人数◉四～八人（推奨人数は五～六人）
時間◉三～四時間
内容◉指南書　◉指示書（五枚）◉試練書（四枚）
◉結山者の証　◉結山者の道　◉結山者名

あそび方

事前の準備

一◉「結山者の道」を人数分、両面印刷し組み立てましょう。
　スマホであそぶ場合、ページを参照できるように開いておきましょう。

二◉以下の準備物を用意しておきましょう。

準備物

（全てなくてもあそぶことは可能ですが、用意するとより楽しめます）
◉カードリング
◉ドライバッグやビニール袋
◉ひもや登山ロープ一〇㍍分
◉手拭いやウェットティッシュ（ないと困るかも）
◉水汲み用の容器やペットボトル（一人あたり五〇〇㎖程度）
◉登山に必要な基本装備（水分、雨具、防寒着、地図、方位磁針等）

あそびの流れ

一◉事前の準備を済ませましょう。

二◉この指南書を読んで、あそび方を把握しましょう。

三◉当日「進行役」をひとり決めましょう。
　進行役は、他の参加者同様にあそびながらも、それに加えて、進行を担います。
「結山者の道」を読みながら、結山者ゆかりの地に到達したら、「試練の書」を参加者に配りましょう。
　試練のルールを読み上げるなどして、あそびを導きましょう。

四◉最後に、各々の体調や他の登山客、自然環境に気をつけながら、楽しみましょう

印刷の仕方

コンビニプリント等での印刷時は、左記の設定で印刷してください。
◉用紙にあわせる　「しない」を選択
◉２ページを１枚に「しない」を選択
◉両面のとじ位置「短辺とじ」を選択

三つのＰＤＦファイルそれぞれの印刷設定です。

◉PlayMap_A3_color.pdf「結山者の道」	Ａ３	カラー	両面印刷　二ページ（短辺を綴じる）
◉PlaySheet_A4_color.pdf「試練書・結山者の証」	Ａ４	カラー	両面印刷　十一ページ（短辺を綴じる）
◉PlayBook_A4_grey.pdf「指南書・指示書」	Ａ４	モノクロ	両面印刷　十四ページ（短辺を綴じる）

結山者の道

一

公時神社

山折り

結山者見習いとして
山に入るための「結山者名」を受け取り、
試練の準備を行う。

一◉物語の設定を確認する

ここから試練が始まる。
まずは「結山者の道」を各自読む。
一人が読み、他の者が続いてもよい。
読み終えたら、次の指示に従うこと。

二◉水汲み

神社の境内にて、湧水を汲める場所がある。
空の容器に一人五〇〇㎖を目安に水を汲む。
これは第三の試練で使う。

三◉結山者名を受け取り、名乗る

一人ずつ前に出て、無作為に一つ名を選ぶ。
その後、進行役から順に、
自分の結山者名の特徴を想像し、名乗りを行う。
形式「私は三代目〇〇〇です。私は……」
例　「私は三代目風走りです。
　　風のように速く走り、山の息吹を全身で感じます」
「代」の数は、同じ名を持った先人がいたことを示す。
彼らの技と知恵が、いま自分の中に宿っている。
これからの試練で、その力を目覚めさせていく。

四◉山との最初の結びの儀を行う

その場でしゃがみ、地面に手を触れる。
温度を感じる…質感を確かめる…
山からのメッセージを受け取る……。
三〇秒ほどたち、準備が整ったと思ったら、山に入る。

移動中の注意点◉結山者として歩く

あなたは、ただの登山者ではない。結山者見習いである。
山を登る間、あるいは移動の途中では、
自分の結山者名の特性を意識して歩くこと。
例　「風走り」は風の動きに注目する。
　　「水守り」は水の流れや音に耳を澄ませる。

結山者の道

㊡

手毬石

金太郎が初めて『結山者』の力に目覚めた聖なる場所。

「手毬石」の物語
ここ手毬石にまつわる物語を、各自読む。
一人が読み、他の者が続いてもよい。読み終えたら、次の指示に従うこと。

　これが『手毬石』――金太郎が山と初めて結びついた証。
今から千年以上前、この山が荒れ狂っていた頃の話。
幼い金太郎は、山のさまざまな要素が分断されていることに気づいた。
水は独りよがりに流れ、土は固まろうとし、植物は争って伸び、動物たちは互いを避けていた。
　そこで金太郎は、山の様々な存在をひとつに結ぶための『結びの石』を探し始める。
多くの石を試したが、どれも山の力を受け止めることはできなかった。
　ある日、雷雨の中、山頂から転がり落ちる一つの巨石を見つけた金太郎は、その石に駆け寄った。
雷に打たれたその石には、山のすべての要素――土、水、植物、風……の力が宿っていた。
金太郎はその石を手に取り、『手毬』のように転がしながら山のあちこちを巡った。
石は転がるたびに山の力を集め、結びつけていった。
　やがて石はあまりに重くなり、この場所で動かなくなった。
苔が生え、石は山に根を下ろす。これが『手毬石』である。
金太郎はこの石を通じて、カナヤマノカミと対話する術を得た。
そして、真の『結山者』となる第一歩を踏み出した。

一◉手毬石に触れる

石に両手を当て、目を閉じる。

二◉感覚を研ぎ澄ます（一分間）

石に触れ、感じる。
冷たさ、温かさ、震え、鼓動、ざらつき、なめらかさ、
その他の感覚……。

三◉目を開けて感想を共有する

一人ずつ、石から感じたことを簡潔に話す。
例　「石が温かく感じた」
　「山の鼓動のようなものを感じた」

指示書　**手毬石の地**

結山者の道

三

土の記憶の地

山折り

ここで立ち止まって観察する

この道に起きた変化を、結山者の眼で見つめてみよう。

まず現状を確認する

一◉みんなで道を観察

この道をよく見ること。結山者見習いとして、
何か感じることはあるだろうか。
土の状態、道の深さ、周囲の様子を細かく観察する。

二◉一人ずつ気づいたことを発表

例　「土が固くなっている」
　　「根っこが見えている」

この場所に起きたこと

土の喪失の歴史

※進行役が読み上げる（または全員で読む）

この道は、山の土が失われた成れの果て。
かつては、目線の高さまで土があったと
伝えられている。
金太郎が姿を消し、山との調和が乱れたあと、
人の往来が増え、そのたびに土は削られていった。
長い時を経て、これだけの土が失われたのだ。

土の記憶を想像する

一◉想像の時間（三〇秒程度）

以下の情景を、心の中で思い描く。

自分の身体がすっぽり埋まるほどの深さにまで
積もっていた土。
豊かな土に覆われていた頃の道。
そこに生えていた植物たち、歩いていた動物たち。
そして、金太郎が歩いていた時代の風景……。

二◉感じたことを共有する

指示書　土の記憶の地

結山者の道

五

根叫びの地

ここは木の根がむき出しになった場所

第一の試練「枝葉道」を終えたみな。
山が、次に見せたい光景がある。

まず観察して考える

この場所の木の根を、よく観察すること。

問いかけ一◉根の元気度

枝葉道では、元気な枝を見分けて並べた。
では、この木の根は元気だろうか？
一人ずつ、そう感じた理由とともに意見を共有する。

問いかけ二◉見た目の印象

ある未熟な結山者が、かつてこう言った。
「根がむき出しで、かっこいい」
そう感じた者は、正直な気持ちを言葉にしてみよう。

問いかけ三◉土の行方

では、この根を覆っていた土はどこへ行ったのか？
みんなで考えてみる。

根割れの真実

※進行役が読み上げる（または全員で読む）

この場所にあった土は、流出してしまった。
その原因のひとつが「踏圧（とうあつ）」である。
多くの登山者がこの道を歩くことで、
土に継続的な圧力がかかり、
雨が降ると、その土が流されやすくなった。
根がむき出しになることは、木にとって非常に危険な状態。
土がなければ、水も栄養もとどかず、木は弱っていく。

靴を履いて歩いてきたこれまでの道で、
足はどのような踏圧を山に与えていただろうか？
次の「第二の試練」では、裸足で歩く。
靴との違い、身体と山とのあいだにある
感覚の変化に意識を向けてみよう。

結山者の道

九

公時神社

山折り

四つの試練完了！

すべての試練を乗り越えた者たちよ――おめでとう。
このあと、神社の境内を出て、
空いている静かな場所を見つけ、最後の儀を行う。

【進行役が読み上げる】

枝葉道で自然との対話を学び、
獣狩りで山の生き物たちの感覚を身に刻み、
土留めで山を守る技を会得し、
そして、最後の試練も見事に乗り越えた。
すべての印が揃った。
今、君たちは金太郎の遺した『結山者の道』を継ぐ者となった。

カナヤマノカミへの誓い

いま、結山者としての誓いを、
この山に宿るカナヤマノカミへ奉納する。

手順

一◉全員で輪をつくる
　静かに呼吸をそろえ、山の気配を感じる。
二◉一人ずつ、山に向かって誓いを声に出す
　今日の体験で最も心に残ったこと、
　これからの決意を言葉にする。
　例「山の声を聞き続けます」
　　「土の痛みを忘れません」
三◉誓いを紙に書き記す（紙があれば行う）
　言葉を形にして、自らの記憶に刻み込む。

皆の言葉は、カナヤマノカミと金太郎に届いた。
この瞬間から、君たちは金太郎の遺志を受け継ぐ
『結山者』となる。
学びを、山に置いてゆくな。
足の裏で大地を感じること、風の声に耳を澄ますこと、
植物の痛みに気づくこと――
それらは、山だけでなく、日々の暮らしにも生かされていく。

おわりに

金時山での結山者の旅は、ここで一度、幕を閉じる。
だが、真の結山者としての旅は、これからが本番。
山で得た感覚と知恵を、
平地でも、街でも、あらゆる場所で実践せよ。
それが、カナヤマノカミへの最大の敬意であり、
金太郎の遺志を現代に生かすことにつながる。